

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の2年目)

1. 研究課題

生と創造の探究—環世界の人文学

Exploring Life and Creativity—the Studies of *Umwelten*

2. 研究代表者氏名

岩城卓二

Takuji IWAKI

3. 研究期間

2017年04月 - 2020年03月 (2年度目)

4. 研究目的

本研究班は、2015年度から二年間にわたって行われた共同研究「環世界の人文学」の問題意識と成果を受け継ぎつつ、さらなる研究の深化と発展を目指す。本研究班の基底をなす問いは、人間を含む「生きもの」にとって「生きる」とはどのような営みであるのか、というものである。本研究班の課題は、生きものとその周囲の世界との相互作用と不断の変転に着眼しつつ、生命の持続と創造的な変容の過程を探究することを通して、従来の人文学からの脱皮を目指すことである。本研究班では、「環世界」を単なる抽象概念として扱うのではなく、生きもの相互の「あいだ」や「空気」、さらにはそれらの関係の中で生まれる技術や言説など、具体的な事象に寄り添いながら考えることを主眼に据える。具体的な事例の検討と学際的な議論を通して、本研究班は、無文字の知も含めて生きものとしての人間が培ってきた「生き抜くための知」を多角的に探究していく。

5. 本年度の研究実施状況

2017年3月に終了した「環世界の人文学—生きもの、なりわい、わざ」を引き継ぐ本研究班の2年度目である本年度は、引き続き、各班員による個別課題についての研究報告を中心に例会を開催するとともに、ゲスト・スピーカーを招いた研究会を開催し、陶芸家の弥生時代の衣食住を追体験する試みや知的なハンディをもつ人々の農業経験に関してみなで議論したり、生をめぐるさまざまな人間と動物の営みについて、活発な議論を行った。本年度の前半はゲストも交えて広く知識を得る企画を持ち、後半は、2020年度に刊行予定の論集に向けて、具体的な内容について議論を始めた。

6. 研究成果の概要

なし

7. 本年度の研究実施内容

2018-04-04

特別例会:核の時代を写真はどうかとらえてきたのか——豊崎博光と新井卓の理論と実践

発表者 新井 卓 写真家

見えない核を撮る

発表者 豊崎 博光 写真家

2018-04-23

戦後日本の地域化される都市現代性:人間性への生態学的思考

発表者 アンドレア百合フロレス漆間 南アジア地域研究研究所

2018-05-07

なぜ、女性たちは土地を耕すようになったのか——「人びとの側から」の農業史

発表者 友松夕香 学振 PD

2018-05-28

「住まい」と「仕事」

発表者 本原令子 陶芸家

2018-06-16

霊長類混群におけるニッチと社会性

発表者 足立薫 京都産業大学

2018-06-25

電気で演出される「環境コンシャスな音楽」の系譜を辿る

発表者 岡田暁生 人文研

2018-07-02

<郊外>の分解者たち:見沼田んぼとその周辺

発表者 猪瀬浩平 明治学院大学

2018-07-23

イマージュ・アニマル——哲学的動物論と環世界

発表者 森本淳生 人文研

2018-10-01

グローバルな温暖化が突きつける問いと現代哲学・思想における「背景」への関心

発表者 篠原雅武 人文研・非常勤

2018-10-22

炭坑化する世界——空気を満たすテクノロジー

発表者 瀬戸口明久 人文研

2018-11-12

Anthropogenic Tropical Forests: Human-Nature Interfaces on the Plantation Frontier

発表者 石川登 東南アジア地域研究研究所

2018-11-26

粘菌と不安—南方熊楠の「在り方」と生命感へのアプローチ

発表者 唐澤太輔 龍谷大学世界仏教文化研究センター博士研究員

2018-12-10

Toasting and gender in Great-Britain in the eighteenth century

発表者 Rémy Duthille Université Bordeaux-Montaigne

2019-01-28

震災後文学の動物と死、そして書き直し—川上弘美、中森明夫、古川日出男—

発表者 イリナ・ホルカ 人文研

8. 共同研究会に関連した公表実績

10月28日に副班長の藤原が社会思想史学会の分科会(ネイチャーズエコノミー再考。報告者:桑田学、中山智香子)で、「1920年代の「家政学」と「農業経済学」における「家」と「土」をめぐる思想」というタイトルで報告し、環世界班での研究成果の一部を報告した(班員の松村圭一郎も参加)。

9. 研究班員

所内

石井美保、藤原辰史、岩城卓二、岡田暁生、小関隆、王寺賢太、瀬戸口明久、立木康介、森本淳生、イリナ・ホルカ、池田さなえ、小川佐和子、藤井俊之、沈恬恬、福家崇洋、田中雅一、シェル・エリクソン、日高由貴、高木博志

学内

石川登(東南アジア研究所)、伊勢武史(フィールド科学教育研究センター)、山越言(アフリカ地域研究資料センター)、アンドレア百合フロレス漆間(地域研究統合情報センター)、篠原雅武(思修館)、朴美貞(国際高等教育院)、田中祐理子(白眉センター)、高田翔(人間・環境学研究科)

学外

足立薫(京都産業大学)、井黒忍(大谷大学)、岩松正洋(関西学院大学)、大浦康介(京都大学)、小柏裕俊(甲南女子大学)、岡安裕介(NPO 法人京都アカデメイア)、唐澤太輔(龍谷大学)、河田学(京都造形芸術大学)、久保昭博(関西学院大学)、近藤秀樹(大阪教育大学)、斉藤渉(東京大学大学院)、佐塚志乃(トロント大学)、鈴木洋仁(事業構想大学院大学)、茶園敏美(立命館大学)、橋本道範(滋賀県立琵琶湖博物館)、平野徹之(在ドイツ日本大使館)、堀口典子(テネシー大学)、松嶋健(広島大学大学院)、松村圭一郎(岡山大学大学院)、山崎明日香(日本大学)、鈴木和歌奈(日本学術振興会)、中尾麻衣香(長崎大学)、ロー・シンリン(慶應義塾大学)、中空萌(広島大学)

10. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数	参加人数				延べ人数			
		総計	外国人	大学院生	若手研究者	総計	外国人	大学院生	若手研究者
所内	1	18 (5)	2 (1)	0	3 (2)	168 (72)	42 (40)	0	14 (14)
学内	1	8	2	1	3	28	14	3	14

		(3)	(2)	(1)	(1)	(14)	(14)	(2)	(14)
国立大学	6	6 (1)	0	0	0	28 (0)	0	0	0
公立大学	0	0	0	0	0	0	0	0	0
私立大学	11	11 (3)	2 (2)	0	3 (2)	18 (10)	2 (2)	0	2 (2)
大学共同利用機関法人	0	0	0	0	0	0	0	0	0
独立行政法人等公的研究機関	1	2 (1)	0	0	1 (1)	7 (0)	0	0	0
民間機関	1	1 (0)	0	0	0	12 (0)	0	0	0
外国機関	3	3 (2)	0	0	0	17 (5)	17 (5)	0	0
その他	0	0	0	0	1 (0)	6 (2)	0	0	0
計	24	49 (15)	6 (5)	1 (1)	11 (6)	284 (103)	75 (61)	3 (2)	30 (30)

※()内には、女性数を記載

11. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

参加研究者がファーストオーサーであるものを対象

総論文数	15(0)
国際学術誌に掲載された論文数	0(0)

※()内には、拠点外の研究者による成果(内数)を記載

インパクトファクターを用いることが適当ではない分野等の場合

掲載雑誌	掲載 論文数	主なもの	
		論文名	発表者名
リュンコス	1	ライブニッツにおける「絶滅」の思想について の予備考察	山崎明日香
人権問題研究	1	導く星のもとで一人権と法源について の試論一	沈 恬恬
Cultures/critiques	1	歴史の法一日本における司法通訳の 現状についての一考察	沈 恬恬
ZINBUN	1	Records and Diaries Regarding Atomic Bomb Casualties Written	中尾麻伊香

		by Medical Doctors and Scientists	
現代思想	1	人新世的状況における「人間の条件」の解体についての試論	篠原雅武

※拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す

12. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由
なし

13. 次年度の研究実施計画

最終年度である来年度は、これまでの研究活動の成果を踏まえつつ、再来年度の研究成果の出版に向けて、具体的な研究論文のチェックへと進み、お互いの研究の方向性を検討・再調整する。これらすべての研究会と並行して、研究班班員を大きく三つの主題に分けることでそれぞれの個別研究の有機的な関係を明確にし、研究全体を体系的に認識し議論を進める。

14. 次年度の経費

国内旅費	研究会参加費	開催回数 16 回 国内出張旅費(延べ 176 人)	支出予定額(400,000 円)
合計			400,000 円

15. 研究成果公表計画および今後の展開等

次年度は特に後期に国内外の研究者を招へいたシンポジウム形式の公開特別研究会を組織し、これまでの研究成果を公開するとともに、今後の共同研究の方向性の検討と再調整の機会とする計画である。またこれを踏まえながら、定期的な研究会を通じて研究班員の個別研究を体系的に組織化し、最終年度にはそれぞれの論文の書籍化へ向けた研究・執筆につながるように準備していく予定である。